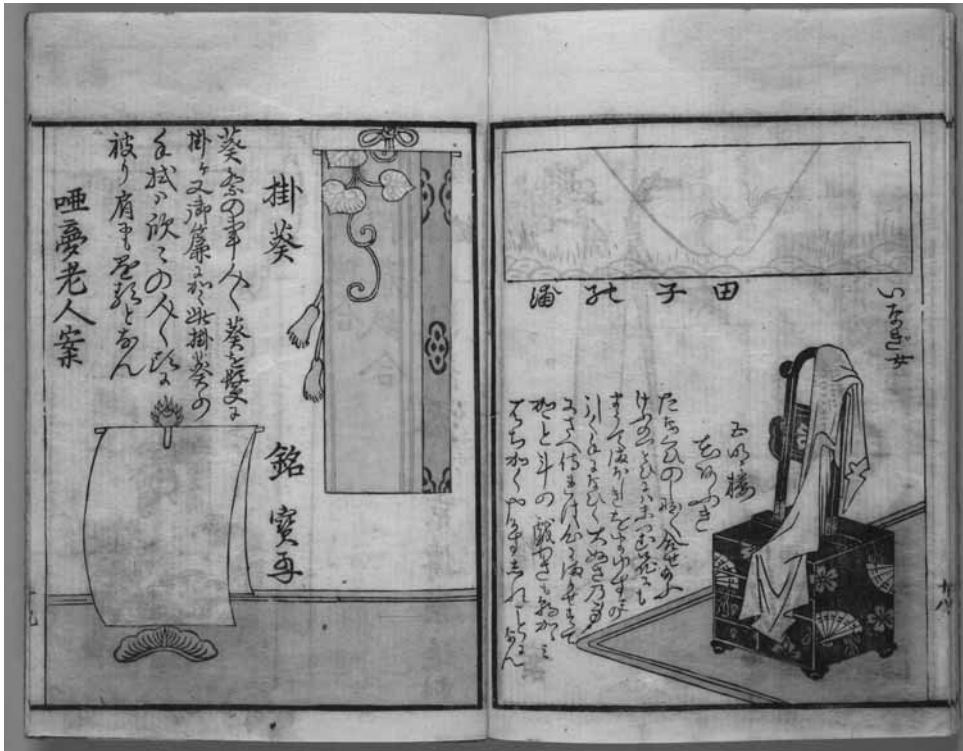


さん とう きょう でん み たて  
**山東京伝の見立絵本(1)**

たなぐいあわせ  
 —『手拭合』—



『手拭合』18丁裏・19丁表

山東京伝、本名岩瀬醒。江戸京橋銀座二丁目に住み、浮世絵の絵師、黄表紙、洒落本、滑稽本、読本、合巻の作家であった多才な人物である。『南総里見八犬伝』で有名な曲亭馬琴は、一時京伝の門人であった。京伝は十代の頃から浮世絵を北尾重政に学び、北尾政演と名乗って黄表紙（絵と文が一緒に書かれている庶民向け読み物）を作っているが、天明二年（一七八二）刊の自画像『御存商売物』で、大田南畝

から「この年最高傑作の黄表紙」と絶賛されて、たちまち花形作者になった。時に京伝二十二歳。これは、様々な江戸の書物を擬人化して、新しい江戸出来の文芸が、旧来の上方下りの文芸に取って代わる文運の変化を描いたものである。さらにその三年後には、蔦屋重三郎板『江戸生艶気樺焼』で、醜貌ゆえに全くもてない艶二郎が、なんとか艶聞を立てたいと苦心惨憺する、愚かしくもおかしい黄表紙が大評判となり、主人公の獅子鼻は「京伝鼻」と呼ばれ、江戸戯作を象徴するものとなる。一方で吉原の太夫達を、自筆和歌入りという新機軸で描いた豪華絵本『新美人合自筆鏡』も天明四年に蔦屋から刊行され、翌五年からは遊里生活体験を踏まえて数多くの洒落本を刊行する。

早熟な時代の寵児であった京伝の晩年は苦しいものだった。寛政三年（一七九一）に蔦屋の要請で、京伝は洒落本三部作を「教訓絵本」と銘打って刊行したが、前年の出版取締令に触れてそれらは絶版、京伝も手鎖五十日の刑に処された。その後は洒落本には筆を折り、黄表紙も変質させた。やがて文化年間には黄表紙は輪郭のはっきりとした敵討ちもの合巻に流れ、古典知識に裏打ちされた諧謔や滑稽は好まれなくなっていく。そして庶民の好みは、中国文学を基とした、ストーリー展開が骨太な馬琴の読本に、次第に取って代わられるのである。

『手拭合』は、天明四年京伝二十四歳の時の見立絵本である。その年の六月に上野不忍池畔のある寺院で、手拭いの図案を集めて展覧し、それらをスケッチしたとされている。しかしその立案者達は狂歌や俳諧をたしむ吉原の通人達であるため、見立てや趣向に満ちたデザインとなる。こうした「物合わせ」の会は、安永年間から流行していた宝合の会や団扇合、浴衣合の流れを汲んでいる。『手拭合』の絵解きは、仲間内でしか通用しないものも含まれ難しい。図版のいなぎ女「田子の浦」は、富士山が逆さまに映っているのか。吉原の遊女である五明楼花扇の鏡台にかかる手拭いは、蜘蛛の巣絞りで、蜘蛛の巣に桜の花びらが掛かる様を暗示したか。唾夢老人の掛葵と宝舟は、見たままのように思われる。

（山下則子）